

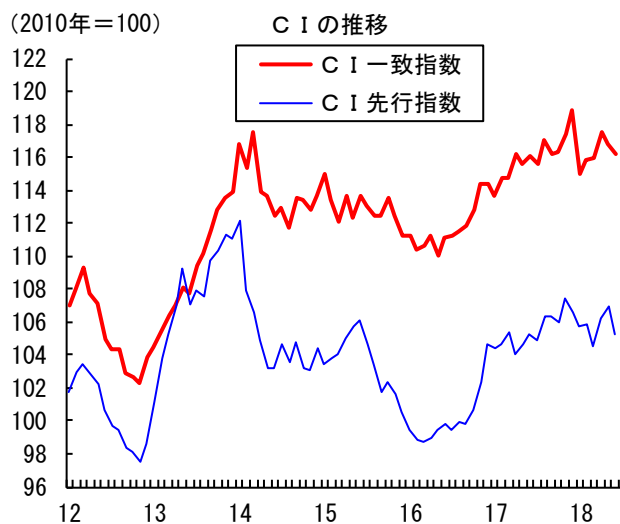
テーマ：景気動向指数（2018年6月）の予測**発表日：2018年7月31日（火）****～C I一致指数は2ヶ月連続の低下に～**

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主席エコノミスト 新家 義貴
TEL:03-5221-4528

○年明け以降、改善ペースが鈍化

内閣府から8月7日に公表される2018年6月の景気動向指数では、C I一致指数を前月差▲0.6ポイントと予想する。内訳では、有効求人倍率や小売業販売額などがプラスに寄与する一方、鉱工業生産指数や投資財出荷指数、卸売業販売額などの下押しが大きく、全体では前月差マイナスが予想される。

C I一致指数は5月の前月差▲0.7ポイントに続いて2ヶ月連続のマイナスになる見込みである。4月に大きく上昇していたことから、4-6月平均でみれば1-3月期の水準を1.2%Pt上回っているが、直近のピークである17年10-12月の水準は下回っており、18年1-3月期の落ち込み分を取り戻し切れていない。持ち直しの途上にはあるものの、その戻りは強いものではないという評価になるだろう。本日公表された鉱工業生産指数でも、1-3月期が減産の後、4-6月期は増産になったものの、戻りが限定的だったことに加え、8月10日に公表されるGDP統計でも、1-3月期のマイナス成長の後、4-6月期はプラス成長が見込まれるものの、反発は弱いものにとどまった可能性が高いなど、他の経済指標でも同様の動きが確認されている¹。景気の回復傾向は続いているものの、その回復ペースについては18年入り以降鈍化していると判断される。



(出所)内閣府「景気動向指数」

(注)直近の2018年6月は第一生命経済研究所による予測値

○基調判断は「改善」が維持される見込み

内閣府によるC I一致指数の基調判断は、21ヶ月連続で「改善」が予想される。前月差では2ヶ月連続でマイナスが予想されるものの、3ヶ月後方移動平均前月差の値は+0.07とギリギリプラスで踏みとどまるとみられ、基調判断は「改善」が維持されるだろう。

ちなみに、基調判断が「足踏み」に下方修正されるためには、「3か月後方移動平均（前月差）の符号がマイナスに変化し、マイナス幅（1か月、2か月、または3か月の累積）が1標準偏差分（1.02）以上」という条件と、「当月の前月差の符号がマイナス」という条件を同時に満たす必要がある。今のところ判断下方修正のハードルは高そうだが、仮に7月分の数字が豪雨等の影響で下振れるようなら、そうした可能性も視野に入ってくる。警戒しておくに越したことはないだろう。

¹ 詳しくは、Economic Indicators「2018年4-6月期GDP（1次速報）予測」（7月31日発行）をご参照ください。